



鹿児島県の主要街道 (江戸時代)

『鹿児島県史』によれば、江戸時代には鹿児島城下から延びる「大口筋」・「出水筋」・「日向筋」の各街道があり、「これらにより、大阪・江戸へ連絡するには、通常、出水筋・大口筋では豊前小倉に、日向筋では宮崎細島に出て、ともに海路を取る」とあります。

日向筋は加治木の綱掛橋で大口筋と別れ、ほぼ現在の国道10号に沿って走っていました。

掛橋坂は、現在の県道川内加治木線の前身である旧県道上にあり、加治木・帖佐・蒲生を經由して、藺牟田・祁答院を結ぶ重要な地方街道であったと考えられます。

始良市内の歴史の道



国史跡 **大口筋 白銀坂**
 始良市脇元 距離 2.68 km



国史跡 **大口筋 龍門司坂**
 始良市加治木町木田 距離 486.8 m

掛橋坂の位置図

始良市蒲生町 北字込原 距離 661 m



【発行】

始良市教育委員会社会教育課文化財係
 始良市加治木町本町 253 番地 ☎0995-62-2111 (内線 210)



かけ はし ざか
 始良市 指定史跡 **掛橋坂**



鹿児島県始良市蒲生町北字込原

始良市教育委員会

掛橋坂 (かけはしざか)

古くは道幅が狭く危険な板敷きの道=「棧(かけはし)」で、地名「掛橋」の由来となった可能性があります。

江戸時代には、蘭牟田・祁答院方面と蒲生を結ぶ地方街道として利用され、帖佐郷にあった納屋町御蔵・小鳥御蔵まで、毎年たくさんの年貢米が輸送されました。掛橋坂は、道中最も厳しい難所として知られ、18世紀末、寛政8年(1796)までには、地山の石を削った石段や切り石を敷き詰めた石畳が完成したようです。

明治30年代以後は、馬車輸送のため、急こう配の掛橋坂を避け、迂回路をとった県道(現川内加治木線)が整備されると、掛橋坂の記憶は、次第に人々から忘れ去られました。

しかしながら、掛橋坂は、幹線道路の役割は終わりましたが、戦後も西浦・北両地区の人々の生活道路として今日まで大切に保存されてきました。

市教育委員会では、現地調査や文献調査などを進め、掛橋坂の文化財的価値を見定めていきたいと考えています。現地での見学は可能ですが、危険箇所もありますので、安全には十分注意してご見学ください。

【所在地】 鹿児島県始良市蒲生町北字込原
【全長】 661m 【時代】 江戸時代(後半)



『和漢三才図会』



石畳敷設状況

* 棧(かけはし)=木を渡して作る道のこと。棧道は谷深く或いは流れが急で橋柱を立てることができない所に、岸壁から行桁(ゆきげた)を組み出して作ったもの。



駐車場 (P) 西浦

区間距離 35m



岩壁に残る棧(かけはし)の行桁跡か。



◎石畳の様子
写真左上が降り口



壁面残る当時のノミ穴

区間距離 337m (指定範囲)

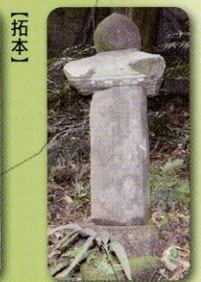
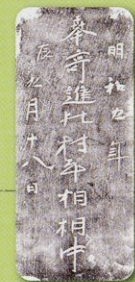


〔拓本〕

寛政八丙辰
奉寄進
庚申供養
北村下二才中
正月廿二日

〔解説〕

〔解説〕
明和九年(一七七二)
奉寄進北村午相相中
九月十八日



〔写真〕

【寸法】 高さ104センチ 柱幅21.3×奥行19センチ 台座幅35×奥行30センチ

◎北村午相寄進の馬頭観音碑
地元では、通称「馬頭観音」と言われています。江戸時代後半に北村の午相の人々が建立したものです。午相がどのような集団であるかは不明ですが、馬による運送に従事する集団と推測されます。

区間距離 289m

坂の途中に架かる石橋



◎北村庚申供養碑 【寸法】 幅70×高さ70センチ
江戸時代後期、寛政8年(1796)に当時の北村の青年たちが岩肌に刻んだもの。庚申とは「かのえさる」の日に夜ふかしをして長寿を願った庶民信仰です。

標柱